

加藤彰仁

AKIYOSHI KATO

詩人の
雷
ジャケツト



俺なら3秒もいら
ない
2秒かぞえるのに



AKIYOSHI・KATO

要人発言

どきどきしてる

明日こそ

世界はやはり字余りだと

正式に発表される日じゃないかと

はたらく

はるかなる

仕事をしています

はがかける

仕事をしています

はるかなつ

仕事をしています

万年

今日こそ

万年雪のプラモをつくった人を

探しに行くって

万年雪みたいなかつらかぶって

出て行ったよ

たぶん

プラネタリウムそっくりな

プラネタリウムを

するめいかで

ひっぱたいたかもしれない

けはい

はらっぱみたいな草原の

向こうに

向向向がいる

ちょっと待って

鼻翼についてるそれ米粒じゃなくて

おれのiPS細胞じゃないか

思い出にしたことがないから

忘れるわけがない

※目の前に座っている恋人同士であろう彼女の会話を
口の動きから（連想的結びつきをつくらず）言葉を追ってみる

ねえ

とっても

やさしいきもちでそうぞうして

うだいじんが、さぼうだむに

すっごくごくごくしているの

キャンペーン

窓口に行こう会に

入会した人だけに

その角をまがると

わかめがもらえる窓口があるから

回

回が何かに乗って

ぐるぐると廻ってくれば

登場シーンだろうし

何の目的もなく

ぐるぐると廻っているなら

壮大な最終回になるだろう

お誘い

ぱっぱっ

パソコンひらけ

ぴっぴっ

ピンからきりの

ぺっぺっ

ペンチがあるぞ

ぽっぽっ

ポイントつきの

例え

悩んで

どうなるのか

まだ試してもいないのに

春風

恐竜のような名前の

椅子に座って

彼女は

星座のような名前の

くしゃみをしてる

る

るって好き

るのくるりってなってるところが好き

でもいちばんは山田さんの書くるで

もうるなんかじゃない

るいーってよびたくなる

面談

僕ほど不真面目なやつがいるだろうか

どれくらい不真面目かというと

三年前から頭のうえに

ペポかぼちゃをのせている

ゆるむ

止水栓をしめて

蛇口をひねった

そのまま

闘牛の角もぎゅっとしたい

あらゆるものが

なじみおわって

マンガン

マンガンのせいにする前に

電池を逆向きに入れる

人類も疑うべきである

そしてマンガンも

とくだん

地図に載っているアラスカと

地図に載っていないかりん糖

これについて誰も

正しいことを言っていないが

間違ったことも言っていない

鹿の話しをしていたのに

いつのまに夜の話しになっていた

日がくれて

終わらないものたちが

つながりにつかもうとしている

各位

今までの半ズボンにはなかった

金属音をつけてみましたが

邪魔ではないという

まっとうな意見も頂いております

もちろん

ひらがなは

もちのようにやわらかいけれど

きゅうにひっぱると

ビローンと

カタカナがあらわれる

それは熱によってもたされたものだから

もともとのひらがなの性質であったなどと

言われたりしたが

それをそのまま大切に伝えたことにより

昔話として有名なこぶ取りじいさんに

なったのではないぞ

手品

たねをあかさない

げんしょうをせつめいしない

くりかえさない

または世界も

しんこうほうこう

紙一枚でさえ

目の前におけば

世界が見えなくなる

お互い

こらえている

君のうしろで

こらえている

希望がある

ぶんし

山をふちどる雪の遠くに

夏の光がみえる

それは想像力だったろうか

反応

彼は突然ひらめいた

本当に突然で

もちを口元に突き出されると

思っただけぞった

プログラム

とおくにあるものは

いつまでもとおくにある

これだけしか

入力されていなかった

幸せについても

プラネタリウム投影機に乗せた

軽トラックが首都高を

もの凄いスピードで走っている

世界が何か人類を

大きなスキャンダルに巻き込み始めているようだ

瀬波

まぶしさに

砂たちがにぎわって

もう少しで思い出す

さっきまで

私たちも夏だった

恋

水槽に

熱帯魚を入れたら

海の匂いがしたという

嘘

困む

入口があって

出口まである

ただの迷路だな

残業

彼女は気をとりなおして

またくる夏に

うっとりしている

時給800円で

てのはて

手相をみたら

はなしてあげる

手相の本のはなし

距離感度

氷河の描かれた屏風を

ぱたぱたと折り畳んだり広げたりしている

間近じゃなんの事かわからないが

やまのふもとから見れば

それでも何かの祭りには見えるかも知れない

外気圏では

何かそのぱたぱたに

人類の重要なメッセージが隠されているはずだと

見知らぬ望遠鏡がジッとその動きを捉えている

今、振り向いたら

家庭の医学に載らなかった

家庭向きじゃないほうが見えた

句読点

出来たばかりの句読点だ

てっぺんなんかつるつるしてるが

きゅっと

感情だっつとめられる。

祝日

明日に誰も行ったことがない

けれど明日にはつながっている

日々はそうして君を歓迎している

もらう

明日を

おしみなく

あげるのが

若さなのかもしれない

そうでなければ

泳ぎまわっているだけの

陽は暮れていかない

残像

生きていることを

つかってまで

死んでゆこうとする形

雪あかり

ひかりの届く

とおくから

やってきたのだ

君の最初に見る

空のくらすまで

きざし

春がきた

単純なことだ

君は冬を知っている

詩人の雷ジャケット

<http://p.booklog.jp/book/77815>

著者：加藤彰仁

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/0m1a0m1a/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77815>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77815>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ